

ボリス・ストルガツキイのセミナーと現代ロシア SF

宮風耕治

はじめに

ストルガツキイ兄弟がソビエト時代で最高の SF 作家であったことは世界的にもよく認められているが、近年のロシアでは彼らも SF 作家という枠組みをこえて評価されるようになってきている。児童向けとされる文学百科事典においても、彼らは 20 世紀後半のロシア文学を代表する作家として、ソルジェニーツィン、トリーフォノフ、ヴェネジクト・エロフェーエフ、プロツキイ、ドヴラートフといった、大きく傾向の異なる作家に並んでページが割かれている。⁵⁰

こうした高い評価の背景には、ストルガツキイ兄弟が実作者として優れた小説家であるという事実のほかに、彼らが現代ロシア SF の指導者として精力的に活動したという事実がある。兄のアルカージイは 1991 年に亡くなったが、弟のボリスは 2012 年に亡くなるまで、2 作の長編を発表するなど創作活動を続けるかたわら、カタツムリ賞やアーベーエス賞、遍歴者賞などの各種 SF 賞の選考に関わり、2002 年から 2012 年にかけて SF 専門誌「Полдень, XXI век」の編集に積極的に参加するなど、創作以外の分野でも活躍した。

ボリス・ストルガツキイの創作以外の活動の中で特筆すべきものは、彼が 1974 年以降、レニングラードで開催した若手作家向けのセミナーである。1980 年代にはロシア SF の中でのに「第四の波」と呼ばれる新しい潮流が起こったが、この新しい潮流が目にしたのは、ゴーゴリやブルガーコフといった、不条理で幻想的な現実をグロテスクかつ滑稽に描き出す手法を得意とした作家であった。「第四の波」の作家のうち、アンドレイ・ストリャロフやアンドレイ・ラザルチュークといった先鋭的な部分は、さらに「ターボリアリズム」という言葉を掲げてロシアの SF 小説の革新を目指した。こうした「第四の波」を担った作家の多くがボリス・ストルガツキイのセミナー出身者であることは当時から注目されていた。⁵¹

本稿では、ロシア SF の歴史に大きな足跡を残したボリス・ストルガツキイのセミナーに焦点を当てながら、ソビエト時代とソ連崩壊後の現在という全く性格の違う時代を生き抜こうとするロシア SF 小説の姿を考察したい。

⁵⁰ Энциклопедия для детей. Т. 9 Русская литература. Ч. 2. XX век. М., 2004. ちなみに、ファンタスティカの項を執筆したのは SF 評論家ドミートリイ・ヴォロジエヒンである。

⁵¹ ボリス・ストルガツキイはこうした新進作家の作品を集めたアンソロジー「Фантастика: четвертое поколение» (1991) に寄せた序文で、社会的ファンタスティカ、哲学的ファンタスティカ、ファンタジー、ユーモアファンタスティカ、諷刺的ファンタスティカ、歴史ファンタスティカなど、さまざまな傾向のファンタスティカの作品を書くことができるが、科学的ファンタスティカ（いわゆる SF）がおもしろいと感じられた時代はすでに過ぎ去っており、科学的ファンタスティカは読者の興味を引く存在でもなくなったと強く主張している。「第四の波」という言葉は使われていないが、「第四の世代」という言葉で若い作家たちを呼んでいる点も注目される。Стругацкий А. Н., Стругацкий Б. Н. Собрание сочинений в одиннадцати томах, Т. 11. 2001. Донецк, С. 497-500. SF とファンタスティカの関係も含めたロシア・ファンタスティカの簡単な概略としては以下の文献も参照。宮風耕治『ロシア・ファンタスティカ (SF) の旅』東洋書店、2006 年。

1. セミナーと作家

ボリス・ストルガツキイのセミナー以外にも、ソビエト時代には若手作家向けのセミナーが開催されていた。こうしたセミナーの先駆として、モスクワでは1961年から1966年まで、その当時、SFを精力的に出版していたモロダヤ・グヴァルジヤ社内ではSF関係者の会合が月に2回程度開催されていた。⁵²レニングラードではイリヤ・ワルシャフスキイがSF作家と科学ノンフィクション作家向けのセミナーを1970年から開いていた。⁵³

なかでも特に有名なのは1982年からモスクワ郊外のマレエフカで開催されたセミナーである。このセミナーを主催したのは作家同盟の冒険小説・SF小説部門であり、その部門の副議長を務めていたニーナ・ベルコワが重要な役割を果たした。⁵⁴1985年以降はラトビアのダブルティに場所を移して1992年まで毎年開催された。講師として、当初はエヴゲーニイ・ヴォイスクンスキイ、ドミートリイ・ビレンキン、ゲオルギイ・グレーヴィチ、のちにはセルゲイ・スニェーゴフ、ゲンナージイ・プラシケヴィチ、ウラジーミル・ミハイロフといった、1960年代から70年代にかけて活躍した有力なSF作家が参加し、多くの新進作家をひきつけたのである。⁵⁵

マレエフカ及びダブルティのセミナーが名を高めた理由は、後年に「第四の波」と呼ばれて活躍した作家たちのほとんどがこれらのセミナーに一度は参加したことによる。主な参加者の名を上げると、ヴィタリイ・バベンコ、アンドレイ・ストリャロフ、ヴァチエスラフ・リュバコフ、スヴァトスラフ・ロギノフ、ミハイル・ヴェレル、ボリス・シテルン、エドゥアルド・ゲヴォルキャン、ウラジーミル・ポクロフスキイ、ボリス・ルデンコ、ミハイル・ウスペンスキイ、アンドレイ・ラザルチューク、アンドレイ・サロマトフ、アント・スカランジス、リュドミラ・コジネツ、ダリヤ・トルスキノフスカヤ、セルゲイ・ルキヤネンコ、ウラジーミル・ワシリエフらがいる。⁵⁶ヴィクトル・ペレーヴィンは参加はしなかったが、1989年のセミナーで幹事役を務めていたバベンコによって作品が取り上げられた。⁵⁷バベンコは1980年代の「第四の波」の理論的支柱として活躍した人物である。彼は、1985年におこなわれた『文学新聞』紙上でのSFに関する連載討論企画のなかで、マレエフカのセミナー参加者の中には有望な作家志望者がたくさんおり、20巻以上の本を刊行できるくらいの作品がすでに集まっていると記し、SF界の新しい世代に関して大きな自信をのぞかせていた。

⁵⁸

マレエフカのセミナーでは、特定の明確な立場や目標が設定されているわけではなく、講師が参加者に対して目標などを押しつけることもなかった。⁵⁹講師ごとに行くつかの分科会に参加者が割り振られ、事前に提出されている中短編の原稿について参

⁵² Ключева Б. Здравствуйте, я ваша бабушка! // Если. 2003. №3. С. 270-271.

⁵³ Там же. С. 264.

⁵⁴ Гопман В. Воспоминания о прошлом и немного о будущем // НФ вып. 35. М., 1991, С. 230-239.

⁵⁵ Там же. С. 230-239; Скаландис А. Фэндом, который не сдаётся.

[http://www.ng.ru/style/1999-11-18/16_fandom.html] (2015年1月27日現在有効) .

⁵⁶ Байкалов Д., Синуцын А. Волны // Фантастика 2002 вып. 2. М., 2002. С. 512-513.

⁵⁷ 1989年のダブルティのセミナーについては、参加したアンドレイ・チェルトコフとセルゲイ・ペレスレーギン、セルゲイ・ボロヴィコフがチェルトコフの主催するファンジン「*Оверсан-1990*」に掲載する予定で対談した記事が詳しい。ペレーヴィンについてもそこで触れられている。現在はその記事はアンドレイ・チェルトコフのブログに公開されている。[<http://chert999.livejournal.com/40663.html>]2015年1月27日現在有効。

⁵⁸ Литературная газета. 1985. 10. 9. №41. С. 3.

⁵⁹ Гопман В. Воспоминания о прошлом и немного о будущем. С. 232.

加者が相互に批評するという形式でセミナーは進行された。⁶⁰セミナーの期間は2週間程度にわたり、参加者はその期間を保養所とともに過ごした。⁶¹

マレエフカのセミナー以外には、ヴィタリイ・ピンチェンコが主導して1988年に設立した全ソ新進SF作家創作連合(«Всесоюзное творческое объединение молодых писателей фантастов»)以下、「ВТО МПФ」と略)が主催するセミナーがあり、多くの作家志望者をセミナーに招いて精力的に活動した。⁶²ニコライ・チャドヴィチ&ユーリイ・ブライデルやワシーリイ・ズヴァギンツェフ、レオニード・クドリャフツェフ、ステパン・ワルタノフ、レフ・ヴェルシニンらが参加し、セミナー参加者の作品は«ВТО МПФ»が刊行するアンソロジーに収録されて発表された。しかし、「ВТО МПФ»が刊行する作品集の文学的な水準は決して高いものとは認められていなかった。⁶³このほかにも、サンクト・ペテルブルグでアンドレイ・バラブハが主催するセミナーや、バベンコが80年代末にモスクワで主催していたセミナーが知られている。

こうしたセミナーの意義に関しては、文学的な修練を積むための実践的な場所という点ももちろんだが、お互いの交流を深める場として機能した点も見過ごすことはできない。新進作家が出版関係者と接触する貴重な機会でもあった。⁶⁴

一方で、すでにボリス・ストルガツキイのセミナーに参加していたボリス・シテルンは、1986年のダブルティのセミナーに参加したが、別の印象を持っていた。彼はプラシケヴィチにあてた手紙の中で、ダブルティのセミナーはほかと比べてよくも悪くもないが、自分はこうした初心者向けのセミナーに参加する年齢は過ぎているし、100人くらいの参加者のなかから本当の作家になるのはほんの10人ほどの人間だけだと語っている。⁶⁵ボリス・ストルガツキイのセミナーがプロフェッショナルであり、少数精鋭の顔ぶれであったのに対し、マレエフカ及びダブルティのセミナーは大規模で画期的なものであったとは言え、本当に作家を目指す者にとっては物足りない面もあったと言えるだろう。

2. ボリス・ストルガツキイのセミナー

2-1 成立の背景

ボリス・ストルガツキイのセミナーは1974年の3月にレニングラードで初めて開催された。1973年にセミナーが開催されていたという記述もあるが、アントン・ペルヴェンシンのよれば、ワルシャフスキイが1970年から開催していたセミナーの熱心な参加者が引き続いてボリス・ストルガツキイのセミナーにも参加したため、記憶の食い違いが生じているとのことである。⁶⁶ボリス・ストルガツキイのセミナーに参加するためには、精力的に作品を執筆するSF作家でなければならなかった。⁶⁷当初はセミナーの存在自体が非公式であったが、次第に参加者が広がり、アレクサンドル・シ

⁶⁰ 前注8参照。[<http://chert999.livejournal.com/40663.html>]2015年1月27日現在有効。

⁶¹ たとえば、1988年のセミナーは11月21日から12月3日までダブルティの保養所で開催された。*Бабенко В., Голман В. Меридианы фантастики // НФ вып. 34. М., 1990. С. 235.*

⁶² *Байкалов Д., Синицын А. Ровесники фантастики // Фантастика 2000. М., 2000. С. 500.*

⁶³ *Байкалов Д., Синицын А. Волны. С. 513.*

⁶⁴ マレエフカの参加者の作品からなるアンソロジーも刊行された。ポクロフスキイやアレクサンドル・エトーエフらの作品を収めた、アントン・モルチャノフ(アント・スカランジスの本名)が編集した次のようなアンソロジーがある。*Парикмахерские ребята. М., 1992.*

⁶⁵ *Прашкевич Г. Малый бедкер по НФ // Малый бедкер по НФ. М., 2006. С. 532.*

⁶⁶ *Если. 2008. №4. С. 264.*ワルシャフスキイは1974年に亡くなった。

⁶⁷ *Там же. С. 264-265.*

チョゴレフが幹事を務めた 1980 年代末には 40 名程度のメンバーがいたと言う。⁶⁸晩年はボリス・ストルガツキイの体調不良もあり、彼自身はセミナーに参加しないことも多くなった。⁶⁹初期からの熱心な参加者としては次のような人物がいる。リュバコフ (1974 年参加)。⁷⁰ロギノフ (1974 年参加)。⁷¹シテルン (1974 年参加)。⁷²ストリャロフ (1982 年参加)。⁷³ヴェレル (1977 年参加)。⁷⁴アンドレイ・イズマイロフ (1978 年参加)。⁷⁵ほかに、ナタリヤ・ニキタイスカヤ、ヴィクトル・ジリン、ナタリヤ・ガルキナ、ドミートリイ・カラリス、アンドレイ・ジンチュクらも参加した。⁷⁶特にストリャロフ、リュバコフ、ロギノフ、ヴェレル、シテルンは「第四の波」の代表的な作家となり、1980 年代半ばから 90 年代にかけてロシアの SF 界を牽引する存在となった。1980 年代後半にはアレクサンドル・チューリン、アレクサンドル・シチョゴレフ、ニコライ・ロマネツキイ、ニコライ・ユタノフらが参加し、セミナーの規模も少しずつ拡大していった。1990 年代に入ってから活動は精力的に続き、近年もヴィクトル・トチノフやドミートリイ・コロダンといった新進の作家がセミナーの一員となった。

しかし、ストルガツキイ兄弟にとってセミナーを開始した当時は苦難に満ちた時代であった。ボリス・ストルガツキイがセミナーを開催するまでの彼らの作風の変遷を簡単に振り返ってみよう。

ストルガツキイ兄弟は 1958 年からコンビを組んで創作を始めたが、当時はイワン・エフレモフが長編《Туманность Андромеды》(1957) を発表して大きな反響を巻き起こし、スプートニクの打ち上げや「雪どけ」の傾向ともあいまって、スターリン時代に低迷していた SF が再興を遂げた時代であった。⁷⁷ストルガツキイ兄弟のほかにも、ゲオルギイ・グレーヴィチ、イリヤ・ワルシャフスキイ、ゲンリフ・アリトフ、ワレンチナ・ジュラヴリョワ、ドミートリイ・ビレンキン、アナトーリー・ドニエプロフ、セーヴェル・ガンソフスキイ、エヴゲーニイ・ヴォイスクンスキイ&イサイ・ルコジャノフ、セルゲイ・スニエーゴフ、ワジム・シェフネル、オリガ・ラリオノワ、キール・ブリチョフ、ウラジーミル・サフチェンコ、ヴィクトル・コルパエフらが次々と登場して作品を発表した。こうした 1960 年代の中興の時代は「第三の波」と呼ばれるようになった。⁷⁸

⁶⁸ Мир фантастики. 2013. №4. С. 50-55. [<http://www.mirf.ru/Articles/art5649.htm>] 2015 年 1 月 27 日現在有効。

⁶⁹ Если. 2008. №4. С. 267.

⁷⁰ Рыбаков В. Письмо живым людям. М., 2004. С. 81. リュバコフはバラブハに誘われてセミナーに参加したが、その時セミナーの参加者としては、アレクサンドル・シチュエルバコフ、オリガ・ラリオノワ、フェリクス・スルキス、ガリナ・パニゾフスカヤ、ボリス・ロマノフスキイらがいた。

⁷¹ ロギノフの公式サイトの記事欄を参照。 [<http://ruSF.ru/loginov/>] 2015 年 1 月 27 日現在有効。

⁷² Если. 2008. №4. С. 265. シテルンの短編《Чья планета?》が第一回目のセミナーで取り上げられた作品である。

⁷³ Там же. С. 267.

⁷⁴ ヴェレルの公式サイトの記事欄を参照。 [<http://www.weller.ru/?id=1>] 2015 年 1 月 27 日現在有効。

⁷⁵ Скаландис А. Братья Стругацкие. М., 2008. С. 656.

⁷⁶ Если. 2008. №4. С. 266.

⁷⁷ 邦訳はエフレモフ「アンドロメダ星雲」(飯田規和訳)『世界 SF 全集第 22 巻』早川書房、1969 年所収。

⁷⁸ たとえば、セルゲイ・ベレジノイの F & Q (1996 年作成) を参照のこと。

[http://lib.ru/SCIFICT/ruSFnews_faq.txt] 2015 年 1 月 27 日有効。

「第三の波」の作家たちはイワン・エフレモフの強い影響下から出発したが、ストルガツキイ兄弟も例外ではなかった。彼らの初期の代表作「Полдень, XXII век」は、主として 1960 年代前半に書かれた連作短編からなるユートピア的傾向の強い作品である。⁷⁹ 当時からストルガツキイ兄弟はエフレモフに続く SF 作家のなかでは最も実力のある作家とみなされたが、無謀な実験を繰り返した末に訪れた惑星規模での破壊を前にした人間を描く中編「Далекая Радуга」(1963)、中世的段階にとどまる他惑星の文明への監視を使命とする地球人の苦悩を描いた中編「Трудно быть богом」(1964)、魔術と科学が混合する研究所を舞台にしたユーモア SF 中編「Понедельник начинается в субботу」(1965) などにより、新しい作風の展開を見せ始める。⁸⁰ 「Трудно быть богом」と「Понедельник начинается в субботу」はストルガツキイ兄弟の代表作となり、彼らの人気はますます高まった。

作家として順調な歩みを続けていたストルガツキイ兄弟に対して、外部からの圧力がかかり始めたのは 1960 年代後半のことであった。1966 年 3 月 5 日にソ連共産党の宣伝局は、ストルガツキイ兄弟の中編「Попытка к бегству」(1962) や中編「Хищные вещи века」(1965) を分析した結果、こうした SF 文学の中では人間や自然、社会に対する反唯物論的な思想が宣伝されており、人間社会の発展に関する初歩的な科学的真実にも反する思想が読者の意識のなかに導入されてしまうと判断し、雑誌『Коммунист』誌上において最近の SF 文学の誤った傾向に対する宣伝運動を実施すること、コムソモール中央委員会によるモロダヤ・グヴァルジヤ社の SF 部門への統制を強化することなどを決定した。⁸¹ 「第三の波」の作家たちに精力的に発表の場を与えていたモロダヤ・グヴァルジヤ社の SF 部門の編集者であったベラ・クリューエワは、当時、編集部への圧力が強まってきていたのは感じたし、コムソモール中央委員会の決議が存在するという噂も聞いていたが、当初は圧力の正体をつかむことができなかったと回想している。⁸² ソ連共産党宣伝局の決定に応じて雑誌『Коммунист』ではヴィクトル・サパーリンが当時の SF の潮流を攻撃し、ほかにも SF 作家ウラジーミル・ネムツォフが『Издвещестья』で、SF 作家ユーリイ・コトリヤールが『Октябрь』で、サパーリンと同様に当時の SF の状況に対する非難の文章を書くなど、キャンペーンに加わった。⁸³ もっとも、コトリヤールはキャンペーンが始まる前からストルガツキイ兄弟らを攻撃する文章を発表していた。⁸⁴ 彼は 1965 年にコムソモールの中央委員会あてにストルガツキイ兄弟らを非難する文書を送付したが、そうした言動は当時からストルガツキイ兄弟に伝わっていた。⁸⁵ ネムツォフら旧世代の SF 作家

⁷⁹ ユートピアという観点からロシア SF の歴史を通観したものとして次の論考がある。*Харитонов Е.* «Русское поле» утопий // *Фантастика* 2002 вып. 2. М., 2002. С. 417-464. なお、ストルガツキイの連作は、1962 年には「Возвращение」のタイトルで一巻に編集されて刊行され、1967 年には「Полдень, XXII век / Возвращение」のタイトルで再刊された。

⁸⁰ 邦訳は『ラドガ壊滅』(彦坂諦訳)、大光社、1967 年。「神様はつらい」(太田多耕訳)『世界 SF 全集第 2 4 巻』早川書房、1970 年に所収。『月曜日は土曜日に始まる』(深見弾訳)、群像社、1989 年。

⁸¹ *История советской политической цензуры. Документы и комментарии / Под ред. Т. М. Горяевы.* М., 1997. С. 155-159.

⁸² *Книжное обозрение.* 1998. №5. С. 22-23.

⁸³ *Ревич В.* Дела давно минувших дней. Фантасты под надзором ЦК КПСС // *Знание-сила.* 1993. №7. С. 86-89.

⁸⁴ 原典は *Молодой коммунист.* 1964. №6. С. 114-120. 筆者はウェブ版を参照した。

[http://fandom.ruSF.ru/about_fan/kotliar_1.htm]2015 年 1 月 27 日現在有効。

⁸⁵ *Пушкарь Д., Чарный С.* Гнев богов.

[http://royallib.com/read/pushkar_dmitriy/gnev_bogov.html#0]2015 年 1 月 28 日現在有効.; *Стругацкий Б.* Комментарии к пройденному. СПб., 2003. С. 132.

にとってはストルガツキイ兄弟らの活躍は自分の出版機会を奪うものでしかなかった。先に触れたモロダヤ・グヴァルジヤ社の SF 関係者の会合で自作を誹謗されたと思ひこんだコトリアルが他の SF 作家を密告し、そのためにクリューエワらによって会合から追放される事件もあったが、彼らが反ストルガツキイ兄弟のキャンペーンに力を貸した理由はこうした私怨に基づく部分も大きかったと思われる。⁸⁶それでもなお、モロダヤ・グヴァルジヤ社の SF 部門の編集部は良心的な出版を続けた。しかし、1973年にセルゲイ・ジェマイチスが編集部から追放されて年金生活に入り、代わりにコムソモール中央委員会の意を受けたユーリイ・メドヴェーデフが編集部に入ると SF 出版界は苦難の時代を迎えることになる。1974年にメドヴェーデフが対立するクリューエワを編集部から追い出すと、新編集部は派閥を形成して SF の出版権を一手に握り、1960年代に活躍した作家の作品の出版すらも拒否できる一大勢力となった。こうした状況の下で、新しい作家が作品を発表してデビューする余地はほとんどなくなり、1970年代はロシアの SF 小説にとっては一般的には冬の時代と考えられるようになった。⁸⁷

ストルガツキイ兄弟の作品そのものの掲載に対しても攻撃が加えられた。「Улитка на склоне」はふたつのほぼ独立した中編が組み合わされた作品であり、まず、カンディードを主人公とする中編が1966年に発表され、その時点では特に当局から問題視されなかった。しかし、1968年にもう一方のペーレツを主人公とする中編が『バイカル』誌に掲載されると、批判を浴び、図書館から本が回収される騒動となった。⁸⁸「Понедельник начинается в субботу」の続編として書かれた「Сказка о Тройке」は、国立児童文学出版所やモロダヤ・グヴァルジヤ社、文芸誌『ネヴァ』、雑誌『ズナーニエ・シーラ』、雑誌『イスカーチェリ』から出版及び掲載を断られ続けた。⁸⁹しかし、ガンソフスキイが編者となっていたズナーニエ社の SF アンソロジーに、掲載原稿の枚数を短縮することという条件で作品を収録できる望みが出てきたため、ストルガツキイ兄弟は「Сказка о Тройке」を1967年の10月23日から25日の3日間に全力を注いで枚数を大幅に削って全面的に書き直した。結局、この改稿版もアンソロジーには収録されなかったが、1968年にイルクーツクの文集『アンガラ』に掲載されることになった。作者が「理性と進歩の力の勝利」として掲載を歓迎したのもつかの間、翌年にはイルクーツクのソ連共産党州委員会の決定により、有害な作品を掲載するという政治的誤りを犯したとして『アンガラ』の編集長ユーリイ・サムソノフが解雇されるという事態に発展した。⁹⁰ここにいたって、ストルガツキイ兄弟自身も自分たちが作品の自由な発表の機会を失ったことを認識した。

さらに、発表を禁じられたこうした作品のテキストが国外へ流出して出版されたことにより、ストルガツキイ兄弟の国内での立場はますます苦しいものとなった。ボリス・ストルガツキイによれば、「Улитка на склоне」、「Сказка о Тройке」、「Гадкие лебеди」の国外出版は、全て著者の了解を得ずにおこなわれたものである。⁹¹1970年代前半に執筆していた長編「Град обреченный」は、作品の内容があまりにもソ連社会を直截に描いているととらえられかねないために、発表は絶望的であると作者自身が考え、1972年の段階で発表を諦めた。ストルガツキイ兄弟の念頭にあったのは、ワシーリイ・グロスマンの長編「Жизнь и судьба」の原稿が掲載予定の文芸誌『ズナーニャ』の

⁸⁶ Клюева Б. Здравствуйте, я ваша бабушка! С. 271.

⁸⁷ Там же. С. 290-293.

⁸⁸ Стругацкий Б. Комментарии к пройденному. С. 162. 邦訳は『そろそろ登れカタツムリ』（深見弾訳）、群像社、1991年。

⁸⁹ 邦訳は『トロイカ物語』（深見弾訳）、群像社、1990年。

⁹⁰ Стругацкий Б. Комментарии к пройденному. С. 169-174.

⁹¹ Там же. С. 174-178.

編集部から当局の手に直接渡り、1961年に原稿が押収された事件であった。⁹² ストルガツキイ兄弟自身は1974年末に「Град обреченный」のコピーを3部作成し、信頼できる人間の手に託して将来の発表の機会を待った。⁹³

ボリス・ストルガツキイがセミナーを開始した1974年は、彼らがこの「Град обреченный」の扱いに苦心していた時期であり、自分たちの作品の発表の機会が制限され、新しい作家のデビューの可能性も失われようとしていた時期であった。したがって、ボリス・ストルガツキイのセミナーは当初から作品の発表を前提としたものではなかった。あくまでも将来に作品が発表できるような時代が訪れることを待ちながら、作家として力を蓄えておくことが第一の趣旨であった。

2-2 セミナーの内容

ボリス・ストルガツキイのセミナーの規模は、マレエフカのセミナーのように大がかりなものではなかった。10名程度の参加者による作品の輪読と批評、作者名を伏せたうえでのコンクール、設定されたテーマについての討論などが主であった。⁹⁴ 1977年にセミナーに参加したミハイル・ヴェレルの回想によれば、2週間に1回程度の頻度でセミナーは開催され、当時のメンバーは全体で20人程度であったが、参加人数はおおむね13人から15人程度であった。セミナーの内容はいたってシンプルで、事前に取り上げられた作品を読み、参加者が順番に批評し、ボリス・ストルガツキイが文学的な面や思想的な面から全体をまとめて、その後でコーヒーを飲んで終わるというものであった。⁹⁵ 2003年からセミナーの進行役をつとめるアントン・ペルヴーシンによればセミナーは次のような形式でおこなわれる。まずは取り上げられる作品に対して、作品の短所を指摘する「検事」と作品の長所を指摘する「弁護士」を選び、「検事」と「弁護士」がそれぞれ意見を述べたあとで、ほかの参加者も自分の意見を述べ、そのあとで全体の議論をまとめて、最後に投票をする。⁹⁶ ボリス自身が作品のスタイルや細々としたことについて口をはさむことはほとんどなかった。⁹⁷

ストルガツキイ兄弟に関する詳細な伝記的著作を執筆したアントン・スカランジスによれば、セミナーにはボリス・ストルガツキイのほかに、全体をまとめる役割の人物がおり、初代を務めたのはアンドレイ・バラブハ（1977年まで）であったが、その後はフェリクス・スルキス、ヴィクトル・ジリン、ナタリヤ・ニキタイスカヤ、アレクサンドル・シチョゴレフ、エレナ&アントン・ペルヴーシンが務めた。⁹⁸ さらに、リュバコフ、イズマイロフ、ストリャロフ、ロギノフの4人がセミナーでの議論をリードしていた。2000年にサンクト・ペテルブルグに移ってきたラザルチュークもセミナー内の重鎮的存在となった。⁹⁹

セミナーの参加者が増えるにしたがって、メンバーの格付けが行われた。ボリス・ストルガツキイが参加者に求めたのは明日にでも出版できる完成稿であり、創作を怠ることは許されなかった。新規の参加者にはロギノフやリュバコフなどベテランのメ

⁹² Стругацкий Б. Комментарии к пройденному. С. 233.

⁹³ Там же. С. 231-234. 邦訳は『滅びの都』（佐藤祥子訳）、群像社、1997年。

⁹⁴ Никитайская Н. Никогда не говорите: «я пишу...» // Нева. 1995. №3. С. 223.

⁹⁵ Веллер М. Мое дело. М., 2006. С. 229-230.

⁹⁶ Если. 2008. №4. С. 265.

⁹⁷ Мир фантастики. 2013. №4. С. 50-55. [<http://www.mirf.ru/Articles/art5649.htm>] 2015年1月27日現在有効。

⁹⁸ Скаландис А. Братья Стругацкие. С. 654. Александр・シチョゴレフの回想は少し異なり、ニキタイスカヤが80年代末まで長く務め、80年代末から7、8年間をシチョゴレフ、再びニキタイスカヤが務めた後、2000年代に入ってペルヴーシンに交代したとのことである。 Мир фантастики. 2013. №4. С. 50-55.

[<http://www.mirf.ru/Articles/art5649.htm>] 2015年1月27日現在有効。

⁹⁹ Скаландис А. Братья Стругацкие. С. 654.

ンバーが後見人となり、後見人が事前に作品を指導することもあった。セミナーへの参加希望者は作品を書くことで正会員の候補者となり、作家として一定の水準を満たすと認められると正会員となる。しかし、一定期間にわたって作品を書かない参加者はメンバーから排除された。¹⁰⁰

セミナーの参加者が口をそろえるのは、ボリス・ストルガツキイは創作上の技術的な指導を行っていたのではないということである。ニキタイスカヤによれば、ボリスは自分を先生と呼ぶことさえ禁じていた。¹⁰¹ボリスは次のように述べていたという。書くことを教えることは誰にもできない。しかし、書き始めたばかりの人に対して、初心者が陥りがちなミスを注意することはできる。自分と同じようなことをしている人と知り合うこともできる。作品を発表していない作者にとって必要なのは他人と知り合える空間であり、フィードバックがなければ作家は死んでしまうのである。¹⁰²セミナー内の相互批評を通じて、若い作家たちは自分のテーマを確立し、独自の技法を身につけた。¹⁰³

最初期からの参加者であるリュバコフを例として取り上げよう。彼がセミナーに参加したのはバラブハから声をかけられたからであった。1974年の秋にセミナーで、後に1990年に「Вода и кораблики」として発表される中編を披露した。作品は好評であったが、発表の当てはまったくなく、その後16年間引き出しに入れたままになった。リュバコフは70年代中頃から後半にかけてのちに代表作となる作品の草稿を書きためたが、それらを整理して完成させたのは作品を発表する機会が大きくなってきた1986年以降のことであった。¹⁰⁴

発表する当てもなく作品を書くことはセミナーの参加者に共通する体験であった。1974年に初めて開催されたセミナーで取り上げられた作品はシテルンの短編「Чья планета?»である。¹⁰⁵しかし、この短編を含む作者の第一作品集が刊行されたのは1987年であった。作品が書かれてから発表されるまでに十数年を要するのは珍しいことではなかった。

作品の発表の見込みがない時代に、ボリス・ストルガツキイは若い作家に向け、「書いているところですとは決して言うな。書きましたとだけ言えばよい」と語ったが、これこそがプロフェッショナルリズムの鉄則であった。¹⁰⁶発表する当てがなくても作品を完成させるのがプロとしての作家の条件なのである。文学の営みはこうした徹底した態度の上に築かれるものであり、この厳しさの自覚がボリス・ストルガツキイのセミナーの特色であった。

3. 1980年代以降の新しい展開

長年にわたって続いたモロダヤ・グヴァルジヤ社によるSF出版の独占体制は1980年代中頃から崩れ始めた。掲載誌の回収処分などを受けて以来、国内では再版されていなかった「Улитка на склоне」や「Сказка о Тройке」がペレストロイカ期に刊行され、1988年には、長らく机中にあった長編「Град обреченный」が文芸誌『ネヴァ』に掲載され始めた。

1987年に、ストルガツキイ兄弟は公然とモロダヤ・グヴァルジヤ社に異議を申し立てた。評論「Кое-что о нуль-литературе」において、ストルガツキイ兄弟は、盟友であ

¹⁰⁰ Мир фантастики.2013.№4.С.50-55. [<http://www.mirf.ru/Articles/art5649.htm>]2015年1月27日現在有効。

¹⁰¹ Никитайская Н. Никогда не говорите: «я пишу...». С. 223.

¹⁰² Веллер М. Мое дело. С. 230.

¹⁰³ Никитайская Н. Никогда не говорите: «я пишу...». С. 223.

¹⁰⁴ Рыбаков В. Письмо живым людям. М., 2004. С. 80-83.

¹⁰⁵ Никитайская Н. Никогда не говорите: «я пишу...». С. 221.

¹⁰⁶ Там же. С. 224.

る評論家フセヴォロド・レヴィチがモロダヤ・グヴァルジヤ社の作家たちの内容の空疎な作品群に対して名づけた「ゼロの文学」«нуль-литература»という言葉を使いながら、メドヴェーデフとそのあとを継いだウラジーミル・シチュエルバコフの名をあげて、モロダヤ・グヴァルジヤ社の編集部の改革が必要だと訴えた。¹⁰⁷しかし、ペレストロイカの進展による状況の変化はモロダヤ・グヴァルジヤ社に頼らずとも作品を発表できる可能性があることを作家や読者たちに示した。モロダヤ・グヴァルジヤ社の専横に苦しんだ SF 作家にとって、自分たちの手で信頼できる出版社を設立することは長年の悲願であった。作家はセミナーの外へと進出し始めたのである。

こうした新しい出版社のなかで特に注目すべきものはバベンコが主導したモスクワのテキスト社とユタノフが設立したサンクト・ペテルブルグのテラ・ファンタスチカ社である。バベンコはストルガツキイ兄弟の信頼も厚かった小説家で、マレエフカのセミナーで指導力を発揮し、モスクワの新しい潮流の SF 界を束ねる存在となっていた人物である。彼は 1988 年にソ連では最初期の協同組合方式の出版社であるテキスト社の設立に関わり、続々と SF 作品を出版し始めた。特に注目されるのは、1989 年から刊行を開始したアルファ・ファンタスチカと銘打たれた叢書である。この叢書からは、エス・ヤロスラフツェフ（アルカージイ・ストルガツキイのペンネーム）、ドイツに亡命した作家のボリス・ハザーノフ、バベンコ、イスカンドル、アクションノフらの作品集を刊行したほか、ペレーヴィンのデビュー作となる作品集«Синий фонарь»を 1991 年に刊行し、ソ連崩壊期の苦しい出版状況のなかで「第四の波」を牽引する重要な出版社となった。狭義の SF 作家だけではなく、イスカンドルやアクションノフを視野に入れた編集は、バベンコが考えていたファンタスチカが非常に多義的かつ広範囲のものであったことを示している。また、テキスト社は、1991 年からは書誌学的に整理されたソ連で初めてのストルガツキイ全集を企画して出版を開始した。

一方、サンクト・ペテルブルグでは別の動きが見られた。ユタノフはボリス・ストルガツキイのセミナー出身の小説家であったが、1991 年にテラ・ファンタスチカ社を設立して出版活動に積極的に進出し、ストリャロフ、リュバコフといった同じセミナー出身の作家の作品を精力的に刊行、さらにラザルチューク、ルキヤネンコなどの作品も刊行し、「第四の波」の中心的存在となった。ストリャロフはボリス・ストルガツキイのセミナーに触れたエッセイのなかで、テラ・ファンタスチカ社についても特別な感情をのぞかせている。¹⁰⁸

こうした SF 出版界の新しい動きを支えたのがファンたちの活動であった。特に 1990 年代初頭のサンクト・ペテルブルグの SF 界においては、こうした出版活動とファンの活動が連動していたことが大きな特徴である。1989 年に SF ファンのウラジーミル・ラリオーノフが中心となって、レニングラード近郊のソスノヴィイ・ボールでファンツールという名の SF 大会が開催され、成功を収めた。¹⁰⁹さらに、アレクサンドル・シドロヴィチやアンドレイ・ニコラエフ、ラリオーノフといった SF ファンたちがボリス・ストルガツキイを誘い、1991 年 2 月 1 日から 5 日にかけて、ソスノヴィイ・ボールで SF 大会インタープレスコンを開催した。¹¹⁰その後、インタープレスコンはサンクト・ペテルブルグで毎年開催されるようになった。1992 年からはボリス・ストルガツキイの審査によりすぐれた小説や評論に対して与えられる「青銅のカ

¹⁰⁷ Стругацкий А., Стругацкий Б. Собрание сочинений в одиннадцати томах, Т. 11. С. 414-419. 初出は В мире книг. 1987. №10. レヴィチの文章については次の文献も参照。Ревич В. Перекресток утопий. М., 1998. С. 287-310.

¹⁰⁸ Если. 2008. №4. С. 267-271.

¹⁰⁹ Александр Сидоровичへのインタビューより。Если. 2001. №7. С. 297.

¹¹⁰ Если. 2001. №7. С.298. また、インタープレスコンの公式サイトも参照。

[<http://ruSF.ru/interpresscon/1991/index.htm>]2015 年 1 月 28 日現在有効。

タツムリ賞」が創設された。¹¹¹1993年には、事前にノミネートされた作品の中から、参加したファンの投票によって選出されるインタープレスコン賞が創設された。¹¹²さらに、90年代前半にはアンドレイ・チュルトコフ、セルゲイ・ベレジノイといった精力的なファンがサンクト・ペテルブルグに移住してテラ・ファンタスチカ社に入社し、サンクト・ペテルブルグはプロとファンの力が結集した新しい潮流のSFの拠点となったのである。テラ・ファンタスチカ社は1996年からストルガツキイ兄弟の作品選集《Миры братьев Стругацких》を刊行したが、この他にもチュルトコフの編集により、ストルガツキイ兄弟の作品設定にもとづいた、ラザルチュークヤルィバコフ、ウスペンスキイらによる書き下ろし作品を収録したアンソロジー《Время учеников》(1996)が刊行され、非常に好評を博した。¹¹³この書き下ろしアンソロジーは第3集まで刊行された。

また、サンクト・ペテルブルグの文芸誌『ネヴァ』が果たした役割も非常に大きなものであった。同誌の編集部には長く勤めたサムイル・ルリエは、1960年代からストルガツキイ兄弟の作品を高く評価し、老練な編集者としてストルガツキイ兄弟の作品の雑誌掲載にあたっては尽力し、中編《Обитаемый остров》を掲載した。¹¹⁴『ネヴァ』に作品が掲載されるのはサンクト・ペテルブルグに拠点を置く作家が中心であるが、ペレストロイカ期に入るとSF的作品の掲載が増えてきた。1986年の第8号と第9号にストルガツキイ兄弟の中編《Хромая судьба》が掲載されたのを皮切りに、1987年第1号にはルィバコフの短編《Свое оружие》が掲載、さらに1987年第8号と第9号にはアレクサンドル・ジチンスキイの長編《Потерянный дом, или Разговоры с милордом》が掲載された。その後に『ネヴァ』に掲載された主要なSF的作品には次のようなものがある。ストルガツキイ兄弟の長編《Град обреченный》(1988年第9号、第10号、1989年第2号、第3号)。ルィバコフの短編《Носитель культуры》(1989年第4号)。¹¹⁵ルィバコフの中編《Не успеть》(1989年第12号)。ヴェレルの短編《Узкоколейка》(1990年第3号)。アルカージイ・ストルガツキイの戯曲《«Жиды города Питера», или Невеселые Беседы при свечах》(1990年第9号)。ストリャロフの中編《Маленький серый ослик》(1992年第1号)。ストリャロフの中編《Послание к коринфянам》(1992年第5号)。ルィバコフの長編《Гравилет «Цесаревич»》(1993年第7号、第8号)。シチョゴレフの中編《Ночь навсегда》(1994年第4号)。ストリャロフの長編《Я – мышинный король》(1994年第5-6合併号)。ガルキナの中編《Ночные любимцы》、ストリャロフの短編《Полунолуние》、ミハイル・ガヨホの短編《Каменный круг》(以上3作は1995年第4号)。ルィバコフの短編《Смерть Ивана Ильича》(1997年第4号)。その後はSF的な作品の掲載は少なくなる。

このように『ネヴァ』は、90年代前半においては、ストリャロフ、ルィバコフ、ヴェレル、シチョゴレフ、ガルキナといったボリス・ストルガツキイのセミナー出身の作家の作品を定期的に掲載し、さらにSF作品に対する書評も積極的に掲載していた。¹¹⁶『ネヴァ』は国内にSF専門誌が少ない中で、サンクト・ペテルブルグのSFの潮流を発信する貴重な媒体であった。

¹¹¹ インタープレスコンの公式サイトを参照。

[<http://ruSF.ru/interpresscon/1992/index.htm>]2015年1月28日現在有効。

¹¹² インタープレスコンの公式サイトを参照。

[<http://ruSF.ru/interpresscon/1993/index.htm>]2015年1月28日現在有効。

¹¹³ Скаландис А. Братья Стругацкие. С. 659.

¹¹⁴ Стругацкий Б. Комментарии к пройденному. С. 183. 作品の邦訳は『収容所惑星』(深見弾訳)、ハヤカワSF文庫、1986年。

¹¹⁵ 邦訳は「文化を担うもの」(富田恵子訳)『SFマガジン』1998年8月号掲載。

¹¹⁶ 1994年第9号にはロマン・アルビトマンによる書評、1995年第4号にもセルゲイ・ベレジノイによる書評が掲載された。

だが、新しい時代は順風満帆とはいかなかった。文学官僚による出版の支配は終わったが、ソ連の崩壊による旧来の出版システムの完全な崩壊は、文筆で生計を立てていた作家に深刻な影響を与えた。「第四の波」に属する作家のなかでも、ディモフ、シレツキイ、コジネツらは文筆から遠ざかった。ソ連時代に活躍した「第三の波」に属するコルパエフも出版の機会を失った。¹¹⁷

1993年から94年にかけてロシアの出版状況は非常に困難な状況に陥り、雑誌の定期刊行も難しく、出版の契約を結んでも資金不足などの事情から本が出版されずに終わるといったこともあった。シテルンは契約の際に出版社が前金を期日までに用意できなかったという事態も経験したし、逆に出版は結局できなかったのに報酬は出版社から支払われたという喜劇的な状況も経験した。¹¹⁸

しかし、問題は出版の機会といった外部的な要因だけではなかった。すでに1989年にSF評論家のロマン・アルビトマンは、1960年代のソビエトSFについて論じた文章の結びで、この数十年間は、作家たちは書くことができない時代にどう書くかを学んできたが、これからは書くことができる時代にどう書くかが問題だと指摘していた。¹¹⁹発表できないことが前提であったソ連時代に腕を磨いた世代にとっては作品の発表の機会が増えたことは喜ばしいことであったが、市場経済下での出版状況を迎えるなかで、不特定多数の読者に向かってどのように作品を発表するかという問題が作家の内的な課題として認識され始めていたのである。

ソ連崩壊後の出版状況のなかで、1994年の2月17日におこなわれたストリャロフとアンドレイ・ロドススキイによるボリス・ストルガツキイへのインタビューの内容はきわめて興味深い。¹²⁰まず、ボリス・ストルガツキイは、ロシアのSF作家にとっては、現在は作品を出版することは厳しい情勢になっているが、作品が書けないときに出版ができないのは当然としても、作品を発表することさえできないという状況はひどいだけでなく不自然であると指摘する。しかし、10年前は検閲のために、現在は市場のために出版ができないというだけであり、こうした状況は作家にとっては常に存在するのだと述べる。現在では本屋の棚にあるのは英米SFの翻訳ばかりだが、かつては読むことができなかった作品も読めるようになったのだから悪いことばかりではないと指摘する一方で、スタージョンの法則にしたがって、それらの90%は屑であると述べる。その上で、ロシアの作家にもストリャロフ、ルイバコフ、ヴェレル、シテルン、ペレーヴィンら多くの才能豊かな作家が現れていることはロシアのファンタスタチカが生きていることを示すものであると主張する。

これに対してストリャロフは、ロシアの読者にはどのような文学が必要なのか、アメリカのSFと競争すべきなのか、それともロシア独自の文学をロシアの読者は求めているのかと聞く。ボリスはこの質問に対し、ロシアの作家には、単に気晴らしの読物といったものではなく、ある種の人生の教科書や読者を震わせるような体験といったものを書こうとする伝統があるとまず述べ、商業主義にはもちろんよい面も悪い面もあるが、真の作家は低級な趣味にも陥らず、一方で誰にも理解されないようなエリート主義にも陥らないように刃の上を渡っていかなければならないと主張する。ストリャロフは、粗悪な英米SFの翻訳の氾濫など、90年代半ばのロシアのファンタスタチカ

¹¹⁷ Прашкевич Г. О быстротекущем времени, о невозвратном времени... // Колупаев В. Качели отшельника. М., 2003. С. 854-859.

¹¹⁸ Прашкевич Г. Малый бедкер по НФ. С. 534-538.

¹¹⁹ Абритман Р. Тогда, в 60-е...: заметки неочевидца // Уральский следопыт, 1989. №7. С. 51-54. 筆者はウェブ版のテキストを参照した。

[http://fandom.ru/SF.ru/about_fan/arbiman_16.htm]2015年1月28日参照。

¹²⁰ Столяров А., Родосский А. Пейзаж после битвы: беседа с Бориса Стругацким. Уэб上のアドレスは次のとおり。[http://SF.convex.ru/abs/int/bns_pict.htm]2015年1月28日参照。

を取り巻く状況がきわめて深刻であることを指摘し、エリート主義的な文学と商業主義的な文学の分化を問題とする。これに対し、ボリスはこうした分化の問題はロシアにも以前から存在したし、欧米にも同様の問題があると答え、ゼラズニイ、プリースト、ヴォネガット、ブラッドベリ、レムといったすぐれた作家も同様の問題のなかにいるのだとやり返す。そして、文学には数百万人を対象としたものと数千人を対象としたものがあるが、自分たちが書こうとしている文学はつねに数千人を相手にした文学であるし、最大でも 10 万部を超えることはないだろうと述べる。さらに続けて、すぐれた文学はつねに数千人のための文学であるが、これはよくも悪くもない数字であり、ストリャロフやルィバコフ、ラザルチューク、ヴェレルといった作家が数百万人を相手にした文学を書こうとは思うなと忠告する。ボリス・ストルガツキイはストリャロフの本が 10 万部を超えることはないとはっきりと告げ、真の作家はヴォネガットやブラッドベリと競わなくてはならないと言う。

ストリャロフは、ヴォネガットは最良の作家のなかには入らないと思うと言ってなおも食いさがり、英米 SF の氾濫に抗して市場を奪回するには、ロシア・ファンタスチカも新しい読者層としてインテリゲンツィヤをつかまなくてはならないのではないかと主張するが、ボリスはストリャロフの意見に賛意を示しながらも、商業主義的な文学と競争するなかで自分たちの場所を獲得しなくてはならないと言い、ファンタスチカを高い水準をもつ文学に高めていくといつかねてからの自分の夢をかなえるためには、検閲がなくなった現在では、読者の需要が重要になってきた新しい時代が到来しているのだから、その中で競わなくてはならないと強調した。

ここから浮かび上がってくるのは、新しい時代のなかで新しい問題に立ち向かうボリス・ストルガツキイの戦闘的な姿勢である。ボリスはソ連時代の苦境のなかでもセミナーで腕を磨くことで、新しい時代が到来したときに自力で道を切り開くように教えていた。ソ連崩壊後の混乱のなかでもその姿勢は揺らぐことはなかった。しかし、数百万人ではなく数千人の読者を相手にするといっても不特定多数が相手であることに変わりはない。おそらく、真に問われているのは、新しい時代の作家と読者の関係であった。

1995 年にはマリヤ・セミョーノワの長編《Волкодав》がベストセラーとなるなど、ロシア語作家によるファンタジーブームもあって、次第に国内のファンタスチカへの需要が戻ってきた。バイカーロフとシニーツィンは 1995 年をロシアのファンタスチカの二度目の誕生の年と呼ぶこともできると指摘している。¹²¹1998 年の経済危機は、90 年代の翻訳 SF 出版の中心的存在であったリガのポラリス社が倒産するなど出版界への影響も大きかったが、一方でルキヤネンコの長編《Ночной дозор》が発表されるなど質の高い作品も継続的に刊行され、SF 界全体としての損失は小さかった。¹²²なによりもファンダムの熱心な読者がファンタスチカの作家たちを支えていた。各 SF 大会で授与される SF 賞は単なる内輪ぼめではなく、作品が真に届くべき数千人のための目印として機能すべきものであった。もちろん、そうした読者はインテリゲンツィヤとは限らなかった。

もっとも、ボリス・ストルガツキイは単に楽観的な判断をしているわけではなかった。2002 年には、新しく創刊されたファンタスチカの専門誌《Полдень, XXI век》の編集長に就いた。雑誌の表紙には「ボリス・ストルガツキイの雑誌」と冠され、創刊号にはチューリンやシチョゴレフなどセミナー出身の作家の作品が掲載された。後には、この雑誌にはロギノフやラザルチュークといったファンタスチカの本流を行く作家のほかに、ジチンスキイやドミートリイ・ブィコフ、イーゴリ・プローニンといった、どちらかと言うと科学的な要素の薄い、さまざまな傾向の作家が寄稿するようになり、

¹²¹ Байкалов Д., Синецкин А. Ровесники фантастики. С. 507.

¹²² Там же. С. 511-513. ルキヤネンコの作品の邦訳は、『ナイト・ウォッチ』（法木綾子訳）、バジリコ、2005 年。

すでに先行して刊行されていた SF 専門誌「Если」とは一線を画す編集方針が貫かれた。ボリスはその創刊号の巻頭言で、この雑誌は行き過ぎた商業主義化にも無味乾燥で極端なアカデミズムにも陥らないような道を進もうとするものであり、ロシアの SF 的作品の質の良し悪しに関心を持つ読者にとって有益な存在でありたいと宣言している。¹²³ボリスにとって読者は単なる不特定多数の存在ではなく、目に見える存在であったのである。これは自らのホームページ上で何年にもわたり数千もの読者からの質問に答え続けたことからわかるだろう。¹²⁴ボリスは単に書齋で考えるだけの人間ではなかった。新しい雑誌の創刊にも力を貸し、各種 SF 賞で新しい才能を評価し、古くはモロダヤ・グヴァルジヤ社に反発して戦うなど、必要とあれば必要なだけ行動する小説家であった。

一方で、文学を取り巻く社会状況の大きな変化の中で、セミナー自体が変化したことは事実である。セミナー開始から 20 年がたった時点で書かれたニキタイスカヤの回想では、ボリス・ストルガツキイが指導する「文学学校」という、1970 年代の「停滞の時代」のユニークな産物としての活動は終わったと評価されている。¹²⁵また、スカランジスの著作では、1970 年代からのセミナーの参加者であるリュバコフとイズマイロフが、1991 年あたりを境にセミナーは変質してしまったと述べていることが紹介されている。¹²⁶変質の理由として、ニキタイスカヤとリュバコフは、セミナー会場であった作家協会の建物が 1993 年 11 月に火災で被害を受けたことをあげているが、そうした突発的な事件以外の要因もあった。¹²⁷リュバコフによれば、セミナーにとってもっとも輝かしい時代であったのは 70 年代末から 80 年代であった。2000 年代になると、セミナーでされる議論の内容が文学とは直接に関係するものではないこともあり、発表される作品についても、ディテールはもっともらしくできていても作品全体としては全く無意味で、ボリス・ストルガツキイ自身も座ったまま口を開かないことがあったという。¹²⁸イズマイロフは、最近の参加者の中には話の種になるからボリス・ストルガツキイを見に来たというような者もいるという。¹²⁹スカランジスは、こうした近年のセミナーに対する否定的な見解に続けて、確かにセミナーは 1991 年に、ソ連崩壊などの社会的変動と兄のアルカージイの死によって二重に変質したが、セミナーは 1970 年代にはボリス・ストルガツキイにとって非常に重要な存在となっていたし、その後も彼にとって重要な存在であり続けたと指摘している¹³⁰

おわりに

以上、ボリス・ストルガツキイが主催するセミナーとボリス・ストルガツキイの取り組みを中心として、1960 年代以降のロシア SF の歴史を概観した。セミナーが開催されていたレニングラードは 1980 年代後半から 90 年代前半にかけての「第四の波」

¹²³ Стругацкий Б. Слово редактора // Полдень, XXI век. 2002. №1. С. 3.

¹²⁴ ストルガツキイ兄弟の公式サイトには読者の質問にボリス・ストルガツキイ兄弟が答えるという形でのオフラインインタビューが大量に掲載されている。

[<http://ruSF.ru/abs/int.htm>]2015 年 1 月 28 日現在有効。また、スカランジスは読者からボリス・ストルガツキイに寄せられる膨大な質問とその回答という現象に対して、ストルガツキイ兄弟の公式サイトは現代のヤースナヤ・ポリャーナであると記している。Skalandis A. Братья Стругацкие. С. 652.

¹²⁵ Никитайская Н. Никогда не говорите: «я пишу...». С. 221.

¹²⁶ Skalandis A. Братья Стругацкие. С. 653-658.

¹²⁷ Никитайская Н. Никогда не говорите: «я пишу...». С. 221.; Skalandis A. Братья Стругацкие. С. 655.

¹²⁸ Skalandis A. Братья Стругацкие. С. 656

¹²⁹ Там же. С. 658

¹³⁰ Там же. С. 658.

の中心的存在であった。ベーラ・クリューエワはソビエト SF におけるレニングラードの位置は、かつてのソビエト文学におけるオデッサのようなものと述べているが、なかなか興味深い指摘と言えよう。¹³¹

もちろん、ボリス・ストルガツキイのみが 1990 年代以降のロシア SF の潮流の源泉であったわけではない。1960 年代に活躍した「第三の波」の作家の多くが 80 年代末には実作者としては姿を消していくなかで、モスクワではキール・ブリチョフとウラジーミル・ミハイロフが 90 年代になっても精力的に執筆を続けていたし、マレエフカのセミナーで力を蓄えた作家たちも各方面で活躍していた。その中で、ボリス・ストルガツキイが一定の影響力を保ち続けたのは、ソ連崩壊後の新しい状況でも決して屈することのない姿勢を貫き、つねに新しいファンタスチカの姿を追求したからである。その結果、ボリス・ストルガツキイのセミナーを中心としたサンクト・ペテルブルグの SF 界が 1990 年代には非常に求心力の強い存在となりえたのである。

しかし、問題がまだ残されている。ボリス・ストルガツキイのセミナーの参加者はセミナーから多くのことを学んだが、逆にボリス・ストルガツキイにとってセミナーは何だったのかという点である。スカランジスにより、セミナーがボリス・ストルガツキイにとって個人的に重要な意味を持つ存在になっていたことはすでに指摘されているが、セミナーを通じて新しい作家の作品に触れたことでストルガツキイ兄弟の創作にどのような影響が見られたかということは文学史上の大きな問題となるだろう。

そして、さらに大きな問題が私たちの前に現われてくる。それは、現代ロシア SF の潮流の源泉としてストルガツキイ兄弟以外のものがどこにあったのかという問題である。ストルガツキイ兄弟のなかにはゴーゴリもサルティコフ＝シチェドリンも、イリフ&ペトロフもブルガーコフも流れこんでいる。しかし、ザミャーチンやベールイ、プラトノフやアレクサンドル・グリーンといった作家の系譜はどこへ行ったのか。たとえば、ストルガツキイ兄弟と同時代の作家の中では、ファンタスチカ的な作品を書くアナトーリイ・キムはどういう存在なのか。こうした作家たちが探求したものは、現在はどこに残っているのか。いま存在しているもの、流行しているものがロシア SF の可能性のすべてではない。ロシア SF が新たな素材に向き合うとき、おそらくは新たな文学的源泉と手法を発見することが必要になるだろうが、この点は稿を改めて考えることとしたい。

¹³¹ Ключева Б. Здравствуйте, я ваша бабушка! С. 288.